

意識調査から見た保育科の学生像その2

— 保育科学生におけるライフスタイルの変化II —

福 川 須 美

Life-styles of Preschool Education Department Students at Komazawa Women's Junior College II: Their Self-Images /No.2

Sumi FUKUKAWA

はじめに

本研究は、本学在学中の保育科学生の心身の健康状態、生活態度の実態を把握し、保育者養成の教育に活かすことを意図した共同研究の一環である。共同研究の一員として、本学の保育科入学生を対象に1991年度から継続して意識調査を行ってきたが、91年度と92年度の結果については前号に概要を報告した。本号ではまず1993年度入学生の調査結果を、過去2年間の調査と比較しながら見てみたい。^{※(1)}つぎに1991年度生に対しては卒業時にも意識調査を実施したので、入学時との比較が可能である。養成課程を修了し、保育者として現場に立つ学生たちについて、調査結果から考察してみたい。

I 1993年度入学生の意識調査の概要

1. 調査の枠組み

- ① 調査対象 1993年度入学 駒沢女子短期大学保育科学生 126名
- ② 調査時期 1993年4月下旬
- ③ 調査方法 質問紙法により回収(回収率96.8%) 122名
- ④ 調査内容 調査結果の比較対照を行うため、1991年~92年と同様に日本私立短期大学協会保育科学研究委員会作成の「保育科系短期大学生意識調査」の調査項目に準拠したが、1992年と1993年については本学独自の項目を

若干加えた。紙幅の関係で、調査票そのものは掲載できないので、前号の入学時調査票を参照されたい。

2. 調査結果の概要 — 1993年度入学生の特徴 —

1993年度の保育科入学生数は定員減により、昨年度、一昨年度に比べると数十名少なくなっている。全員を調査対象に100%回収を目指したが、残念ながら数人の回収漏れが生じた。以下、調査結果の概要について報告する。なお、各表の全国の数値は、前述の私短協の調査結果である。(全国8ブロックの層別抽出法による41校各50名の学生を対象とした調査で、回収率99.6%2042名の回答結果である。)

① 出身高校と幼児期の教育機関

出身高校は私立普通高校が50数%、公立普通高校が41%と公・私立の割合はこの2年間ほとんど変化がない。(表1)幼児期に通った教育機関は幼稚園が減少し保育所が増加した。しかし全国平均との比較では幼稚園出身の割合が相変わらず高い。(表2)

② 保育科志望動機と資格取得希望

保育科志望については、第一志望の者が過去2年(80%台)よりも増加し、94.3%に上昇した。(表3)志望理由も「保育者として仕事がしたい」が若干増えている。(表4)

免許・資格については無答のひとりを除く回答者全員が取得を希望している。幼稚園教諭免許は90.1%、保育資格は86.1%といずれも前年を上回る取得希望率である。(表5)内訳は幼・保両方の資格取

表1 出身高校

名 (%)

年度	公立普通高校	私立普通高校	公立その他	私立その他	その他	計
1991	93 (52.6%)	82 (46.3%)	2 (1.1%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	177
1992	75 (41.7%)	101 (56.1%)	1 (0.6%)	1 (0.6%)	2 (1.1%)	180
1993	50 (41.0%)	66 (54.1%)	2 (1.6%)	3 (2.5%)	1 (0.8%)	122

表2 幼児教育機関

名 (%)

年度	幼稚園	保育所	保育所・幼稚園	その他	合 計
1991	145 (81.9)	21 (14.7)	5 (2.8)	1 (0.6)	177 (100.0)
1992	153 (85.0)	26 (11.7)	6 (3.3)	0 (0.0)	180 (100.0)
1993	95 (77.9)	20 (16.4)	7 (5.7)	0 (0.0)	122 (100.0)
全国 (’91)	60.2	24.9	14.4	0.5	100.0 %

表3 志望学科

名 (%)

	1991年	1992年	1993年	全国(’91)
保育科 第一志望	149 (84.2)	146 (81.1)	115 (94.3)	1818 89.0
第一志望 ではない	27 (15.3)	34 (18.9)	7 (5.7)	217 10.6
N. A.	1 (0.5)	0 (0.0)	0 (0.0)	7 0.4
計	177 (100.0)	180 (100.0)	122 (100.0)	2042 100.0

表4 保育科志望の理由

名 (%)

志 望 理 由	1991年	1992年	1993年	全国(’91)
子どもが好き	54(28.7)	84(46.7)	53(43.3)	38.3%
保育者として仕事をしたい	61(32.4)	45(25.0)	34(27.9)	32.4
資格をとっておけば将来 の生活に役立つ	35(18.6)	24(13.3)	20(16.4)	16.6
自分の子どもを育てる のに役立つ	22(11.7)	19(10.6)	10(8.2)	6.7
家族にすすめられた	5(2.7)	4(2.2)	0	0.6
先生にすすめられた	2(1.2)	0	1(0.8)	1.1
友人にすすめられた	0	0	0	0.0
ただなんとなく	2(1.1)	0	0	0.9
その他	7(3.7)	4(2.2)	0	2.6
N. A. 不明等	—	—	4(3.3)	0.8
合 計	177(100.0)	180(100.0)	122(100.0)	100.0%

得希望者は81%、幼免のみが9%、保母資格のみが5%である。

資格取得の理由も「将来の生活に役立つと思う」というやや漠然とした選択肢よりも「保育者として仕事をしたい」を選ぶ率が約12%増加し、保育科系私立短大の全国平均に近い比率になった。(表6)

③ 保育職希望者と保育職の継続

卒業後保育職に就きたいと答えた割合も前年より数%増加し71.3%となった。「保育職に就きたくない」は前年7.2%から4.1%に減少し、どうするか「まだわからない」割合も年々減少して24.6%となっている。(表7)

保育職に就きたいと答えた学生の希望就職先は、幼稚園が51%、保育所が22%、福祉施設が8%と過去2年に比べて幼稚園が減少し、福祉施設が増加した。(表8)しかし、保育職は希望しても具体的な就職先は入学後1か月時点では「まだわからない」と答える学生の比率は年々増えている。「まだわからない」には、保育職はあくまで希望であって場合によってはそれ以外の職種に就くことになるかも知れないから「まだわからない」学生とが含まれていると思われるが、今回の調査ではその区別は把握できていない。

保育職には就きたくない学生は122名中5名にすぎず、一般企業希望だが、その理由は「自信がない」「責任が重い」であった。

保育職の継続であるが、前年に比べ「生涯の仕事として続けたい」が倍以上で20%に、逆に「結婚するまで」が半分以下に減少して8%になり、前年と逆転した。また、全体としては前年より18%近く減少したとはいえ「再就職型」は38%で最も多い。そして「まだわからない」が23%と2位を占めている。(表9)

④ 保育職のとらえ方と自己イメージ

共同研究Ⅲで詳しく考察されているが、前年と今年の学生たちの描く「保育者像」も「自己像」もともに実によく似かよっているが、「保育職」のとらえ方や「保育者に必要な事」に対する回答も選択項目の上位3位迄にはほとんど変化がない。しかし4位以下の項目では「女性にふさわしい」「重要だが社会

表5 資格取得の予定

名 (%)

	1991年	1992年	1993年	全国('91)
幼稚園教諭免許状のみ 保 母 資 格 のみ 幼・保 両 方	171(96.6)	36(20.0) 7(3.9) 120(66.7)	11(9.0) 6(5.0) 99(81.1)	96.3
取らない	2(1.1)	1(0.5)	0(0.0)	3.7
取れば取りたい	4(2.3)	0(0.0)	5(4.1)	
N. A.		16(8.9)	1(0.8)	
合 計	177(100.0)	180(100.0)	122(100.0)	100.0%

表6 資格取得の理由

名 (%)

	1991年	1992年	1993年	全国('91)
保育者として仕事をしたい	106(59.9)	100(55.9)	82(67.8)	68.5
将来の役に立つと思う	62(35.5)	70(39.1)	38(31.4)	28.7
その他	1(0.6)	6(3.3)	1(0.8)	1.5
N. A.	8(4.5)	3(1.7)	—	1.3
合 計	175(100.0)	179(100.0)	121(100.0)	100.0%

表7 保育職就職希望の有無

名 (%)

	1991年	1992年	1993年	全国('91)
は い	112(63.3)	117(65.0)	87(71.3)	77.2
いいえ	10(5.6)	13(7.2)	5(4.1)	5.1
まだわからない	55(31.1)	50(27.8)	30(24.6)	17.6
合 計	177(100.0)	180(100.0)	122(100.0)	100.0%

表8 希望就職先 (保育職希望者)

名 (%)

	1991年	1992年	1993年	全国('91)
幼 稚 園	77(68.7)	66(56.4)	44(50.6)	50.7
保 育 所	24(21.4)	30(25.6)	19(21.8)	21.6
福 祉 施 設	5(4.5)	2(1.7)	7(8.0)	11.0
①～③以外の職場	3(2.7)	5(4.3)	—	2.7
まだわからない	3(2.7)	14(12.0)	17(19.5)	11.1
				N. A. 2.9
合 計	112(100.0)	117(100.0)	87(100.0)	100.0%

表9 保育の仕事に取り組む姿勢 (継続意識)

名 (%)

	1991年	1992年	1993年	全国('91)
一時やめて、子どもが大きくなったらまた働きたい	66(53.7)	67(53.6)	33(37.9)	44.5
結婚するまで働きたい	12(9.8)	22(17.6)	7(8.1)	8.9
生涯の仕事として続けたい	15(12.2)	10(8.0)	17(19.5)	22.6
出産するまで働きたい	3(2.4)	7(5.6)	9(10.4)	5.1
まだわからない	25(20.3)	19(15.2)	20(23.0)	17.7
N. A.	2(1.6)	0	1(1.1)	1.1
合 計	123(100.0)	125(100.0)	87(100.0)	100.0

的に認められていない」を選んだ学生が倍増している。(表10)

自分が保育職に向いているかどうかについては、前年に比べ「やや向いている」が減少して、「非常に向いている」が倍増したが、両者を合わせた「向いている」は66%から63%でこれもそれほど変わりはない。「どちらでもない」は31%、「あまり向いていない」は6%である。(表11)向いている理由の選択肢「子どもが好き」「健康である」「明朗・活発である」の上位三項目は不変である。

「あまり向いていない」と答えた7名の理由は「自信がない」「性格的に向いていない」であった。また保育職については「向いている」群と比べて「対人関係が難しい」イメージが強い。

ところで、乳幼児の世話をしたり遊んだ経験のある学生は毎年減少し、93年度は66%に低下したが、乳幼児との交流経験がある学生の方が保育職に向いていると答えた割合が高かった。(表12)

つぎに障害児(者)との交流経験については前年の24%から少し増えて29%の学生が「ある」と答えた。「ある」学生には障害児と健常児の統合保育に「反対」はないが、交流経験のない学生の5%は「反対」と答えている。(表13)

⑤ 学生生活

まず、学生生活をどのように送るかについては、保育職希望群は「2年間で保育者としての知識を学びたい」が78%である。全体的にもこの3年間「保育者としての知識を学びたい」を選択する学生は41%、51%、65%と年々増加し、本年は保育系私立短大の全国平均63% (1992年度) を超えた。(表14)

その他は「大学生活をエンジョイし

表10 保育職のとらえ方 (3項選択)

名 (%)

保育職のとらえ方	1991年	1992年	1993年
子どもが好きでなければつとまらない	145(81.9)	145(80.6)	—
心身ともに健康でなければつとまらない	139(78.5)	142(78.9)	99(81.1)
しっかりした人生観・教育観が必要	93(52.5)	74(41.1)	59(48.4)
向上心・研究心がなければつとまらない	26(14.7)	44(23.9)	37(30.3)
女性にふさわしい	37(20.9)	42(23.3)	58(47.5)
対人関係が難しい	18(10.2)	35(19.4)	25(20.5)
重要で社会的に認められている	20(11.3)	21(11.7)	19(15.6)
重要だが社会的に認められていない	18(10.2)	18(8.9)	26(21.3)
地味でありめだたない	14(7.9)	11(6.1)	9(7.4)
高度な専門技術が要求される	11(6.2)	9(5.0)	4(3.3)
回答者人数	177	180	122

表11 自分は保育者にむいているか。

名 (%)

	1991年	1992年	1993年	全国('91)
非常に向いている	24(13.6)	13(7.2)	18(14.8)	13.1
やや向いている	87(49.2)	106(58.9)	59(48.4)	42.3
どちらともいえない	56(31.6)	45(25.0)	38(31.3)	37.6
あまり向いていない	9(5.1)	15(8.3)	7(5.7)	5.4
全く向いていない	1(0.6)	1(0.6)	0(0.0)	1.0
				N. A. 0.6
合計	177(100.0)	180(100.0)	122(100.0)	100.0%

表12 乳幼児との交流経験

名 (%)

	1991年	1992年	1993年
はい	142(80.2)	138(76.7)	80(65.6)
いいえ	30(16.9)	42(23.3)	41(33.6)
N. A.	5(2.8)	0(0.0)	1(0.8)
合計	177(100.0)	180(100.0)	122(100.0)

表13 障害児との交流経験と統合保育に対する賛否

名 (%)

年度	経験の有無	統合保育賛成	反対	どちらともいえない
1992年 180名	経験有 44(24.4) " 無 134(74.5) N. A. 2(1.1)	100(55.6)	26(14.4)	54(30.0)
1993年 122名	全 122(100.0) 経験有 34(27.8) " 無 85(69.7) N. A. 3(2.4)	73(59.8) 22(18.0) 50(41.0) 1(0.8)	4(3.3) 0 4(3.3) 0	45(36.9) 12(9.8) 31(25.4) 2(1.6)

たい」「大学生としての教養を深めたい」が10%台で、クラブ活動や趣味・特技等をしたは1～2名にすぎない。

今回は既成の調査項目にいくつか付け加えたが、そのなかでアルバイトについての結果を述べると、入学後1か月の段階で、52%がしていると答え、時間は1か月平均40時間程度、職種は80%以上が店員等で、時間給は700円～900円が相場のようなのである。

計算上1か月の収入は平均3万円前後ということになる。なかには50時間以上が10名おり、学業との両立が気にかかる。(表15、表16、表17)

1か月のこずかいの額は、全体では1万円以下、1万円～1万5千円、1万5千円～2万円、それ以上の4つの群に分散しており、使途は圧倒的に食事代と衣料品等で、次が交通費である。2万円以上のこずかいを使っている群にはアルバイトをしている学生が多い。(表18、表19)

⑥ 調査結果の考察

以上述べたように、過去2年間と比較しながら1993年度生の特徴を考察すると、保育科第一志望の学生が増え、学生生活は保育者としての知識を学ぶことを目的とし、保育職に就きたいと希望する者も増加した。自分は保育者に向いていると考える学生の割合はほぼ同じだが、非常に向いていると思う割合は増えた。保育職のイメージや自己イメージについてはほとんど変化はない。このように過去2年間の学生に比べると1993年度入学生は意識的には保育者志向が強いと言えるだろう。

しかし、保育者に向いている理由や乳幼児との交流経験者の減少に見られるように、まだ主観的・観念的なレベルでの「向いている」であり、今後2年間の学業・学生生活による成長を期待したい。

また、入学1か月の時点で過半数がアルバイトをしており、おそらくその後はもっと増えていると予想できる。アルバイトが学生生活のごく当たり前の部分として定着しているようである。入学間もないこともあり、その仕事内容には保育との関連はない。アルバイトと学生生活については詳しい考察が必要と考えられる。(「保育科学生におけるライフスタイルの変化Ⅲ」の『現在気になること』の項目参照)

表14 学生生活のおくりかた

名 (%)

学生生活の送りかた	1991年	1992年	1993年	保育職希望者('93)
2年間で保育者としての知識を学びたい	88(49.7)	89(49.4)	79(64.8)	68(78.2)
大学生生活をエンジョイしたい	60(33.9)	38(21.1)	18(14.8)	12(13.8)
大学生としての教養を深めたい	14(7.9)	27(15.0)	14(11.5)	0(0.0)
クラブ・サークル活動がしたい	4(2.3)	7(3.9)	1(0.8)	1(1.1)
趣味・特技を磨きたい	—	—	3(2.5)	0(0.0)
特に考えてない	2(1.1)	5(2.8)	3(2.5)	2(2.3)
その他	7(4.0)	10(5.6)	2(1.6)	2(2.3)
N. A.	2(1.1)	1(0.6)	2(1.6)	2(2.3)
①+④	—	3(1.6)	—	—
合 計	177(100.0)	180(100.0)	122(100.0)	87(100.0)

II 1991年度生の入学時と卒業時の変化

1. 調査の枠組み

- ① 調査対象 1991年4月 駒沢女子短期大学保育科入学生 177名
- ② 調査時期 1991年4月下旬および1993年1月下旬の2回
- ③ 調査方法 質問紙法により回収
(入学時調査は全数回収、卒業時は回収率94%)
- ④ 調査内容 私立短期大学協会作成の調査票に準拠して作成(入学時調査項目と同じ内容を卒業時に合わせて作成されている。調査票

表15 アルバイトの有無と時間数

していない	している	20時間未満	20~30未満	30~40未満	40~50未満	50時間以上
59 (48.4%)	63 (51.6%)	9 (14.3)	8 (12.7)	11 (17.5)	15 (23.8)	10 (15.9)

表16 アルバイトの職種

名 (%)

	人 数	保育関係	店員等	事務	スポーツ関係	その他	無 答
合計	63	—	52 (82.5)	1 (1.6)	1 (1.6)	5 (7.9)	4 (6.3)

表17 アルバイトの時給

名 (%)

	人 数	700円未満	700~800円未満	800~900円未満	900~1000円未満	1000円以上	無 答
合計	63	8 (12.7)	23 (36.5)	21 (33.3)	4 (6.3)	4 (6.3)	3 (4.8)

表18 1ヶ月のこずかい

名 (%)

アルバイトの有無	人 数	5千円以下	5千円~1万円	1万円~1万5千円	1万5千円~2万円	2万円~2万5千円	2万5千円~3万円	3万円~5万円	5万円以上	無 答
合 計	122	5 (4.1)	23 (18.9)	33 (27.0)	26 (21.3)	7 (5.7)	9 (7.4)	7 (5.7)	6 (4.9)	6 (4.9)
していない	59	2 (3.4)	11 (18.6)	20 (33.9)	13 (22.0)	3 (5.1)	3 (5.1)	1 (1.7)	2 (3.4)	4 (6.8)
している	63	3 (4.8)	12 (19.0)	13 (20.6)	13 (20.6)	4 (6.3)	6 (9.5)	6 (9.5)	4 (6.3)	2 (3.2)

表19 こずかいの使用用途

アルバイトの有無	人 数	食 事 代 (昼食・喫茶等)	衣 料 品 ・ ア ク セ サ リ ー	化 粧 品	趣 味	本 代	交 通 費	そ の 他	無 答
合 計	122	106 (86.9)	106 (86.9)	25 (20.5)	21 (17.2)	32 (26.2)	39 (32.0)	15 (12.3)	2 (1.6)
していない	59	49 (83.1)	53 (89.8)	11 (18.6)	9 (15.3)	18 (30.5)	19 (32.2)	9 (15.3)	1 (1.7)
している	63	57 (90.5)	53 (84.1)	14 (22.2)	12 (19.0)	14 (22.2)	20 (31.7)	6 (9.5)	1 (1.6)

表20 希望就職先と実際の就職先 (1991年度生)

就 職 入学時 希望	幼稚園	保育所	施 設	非保育職	進学他	未 定	合 計
幼稚園 77(43.5)	63 (37.5)	6 (3.6)				(1.2)	71 (42.3)
保育園 24(13.6)	3 (1.8)	40 (23.8)				2 (1.2)	45 (26.8)
施 設 5(2.8)	3 (1.8)	1 (0.6)	3 (1.8)			1 (0.6)	8 (4.8)
保育職未 6(3.4)							
非保育職 10(5.6)				38 (22.6)			38 (22.6)
就職しない —					2 (1.2)	1 (0.6)	3 (1.8)
未 定 55(31.1)						3 (1.8)	3 (1.8)
入学時計 177(100)	69 (41.1)	47 (28.0)	3 (1.8)	38 (22.6)	2 (1.2)	9 (5.3)	168 (100.0)

は紙幅の関係で前号
の入学時用を参照さ
れたい。)

2. 調査結果の概要

卒業を2か月後に控えた時点での調査であるが、資格取得、就職状況、学生生活等の項目について入学時と卒業時の変化を見てみた。

①資格取得と就職の状況

まず、資格取得の状況であるが、入学時は177名中171名(96.6%)が取得希望であったが、卒業時には165名が取得予定である。一般企業就職者も取得しないのは2名のみである。

就職希望と実際の就職先であるが、入学時には幼稚園希望が44%であったが、卒業時には幼稚園希望で幼稚園に就職決定したものは63名(38%)、幼稚園を希望したが保育所に就職した者が6名(4%)、未定が2名である。(表20)

保育所は入学時希望は14%であったが、卒業時には保育所希望で保育所に就職予定者は40名(24%)、保育所希望だが、幼稚園に就職予定者が3名(2%)未定が2名である。

施設の希望者は入学時2%だった

表21 保育職にとりくむ姿勢(継続意識) — 1991年度生 —

姿 勢	入学時	卒業時	幼稚園就職者	保育所就職者
結婚するまで働きたい	12(9.8)	22(17.7)	17(24.6)	4(8.5)
出産するまで働きたい	3(2.4)	14(11.3)	8(11.6)	5(10.6)
一時やめて子どもが 大きくなったら再就職	66(53.7)	45(36.3)	27(39.1)	15(31.9)
生涯の仕事として働く	15(12.2)	17(13.7)	5(7.3)	10(21.3)
まだわからない	25(20.3)	26(21.0)	12(17.4)	13(27.7)
合 計	123(100.0)	124(100.0)	69(100.0)	47(100.0)

表22 保育職への適否—就職先別の意識—

	非常に 向いている	やや 向いている	どちらとも いえない	あまり 向いてない	全く向い てない	計
幼稚園就職者	7(10.1)	31(44.9)	27(39.1)	3(4.4)	1(1.4)	69(44.8)
保育所就職者	3(6.4)	15(31.9)	27(57.4)	2(4.3)	—	47(30.5)
非保育職	1(2.6)	8(21.1)	20(52.6)	7(18.4)	2(5.3)	38(24.7)
合 計	11(7.1)	54(35.1)	74(48.1)	12(7.8)	3(1.9)	154(100.0)

表23 保育職の捉え方—1991年度卒業時—（3項目選択）

就 職	ばつとまらな 心身ともに健康でなけれ ばとまらない	子どもが好きてなけれ ばとまらない	向上心・研究心がなけれ ばとまらない	しつかりした人生観・教 育観がなければならな い	対人関係が難しい	重要だが社会的に 認められていない	女性にふさわしい	重要で社会的に 認められている	地味であり目立たない	高度な専門的技術が 要求される
幼稚園 (69名)	64 92.8	52 75.4	26 37.7	16 23.2	14 20.3	7 10.1	12 17.4	8 11.6	5 7.2	1 1.4
保育所 (47名)	39 83.0	38 80.9	16 34.0	10 21.3	11 23.4	12 25.5	4 8.5	1 2.1	2 4.3	2 4.3
非保育職 (38名)	31 81.6	24 63.2	12 31.6	14 36.8	11 28.9	4 10.5	4 10.5	6 15.8	2 5.3	2 5.3
合 計 (154名)	134 87.0	114 74.0	54 35.1	40 26.0	36 23.4	23 14.9	20 13.0	15 9.4	9 5.8	5 3.2

表24 学生生活の送り方—入学時と卒業時— 1991年度生 名 (%)

	入学時	卒業時	保育職就職	非保育職
2年間で保育者としての知識を学びたい・学んだ	88(49.7)	69(41.1)	59(49.6)	9(23.7)
大学生生活をエンジョイしたい・した	60(33.9)	57(33.9)	34(28.6)	19(50.0)
大学生としての教養を深めたい・深めた	14(7.9)	7(4.2)	2(1.7)	2(5.3)
クラブ・サークル活動がしたい・した	4(2.3)	5(3.0)	3(2.5)	1(2.6)
特に考えてない	2(1.1)	14(8.3)	7(5.9)	6(15.8)
その他	7(4.0)	11(6.5)	10(8.4)	1(2.6)
N. A.	2(1.1)	5(3.0)	—	—
合 計	177(100.0)	168(100.0)	119(100.0)	38(100.0)

が、卒業時には施設希望で施設に就職予定者は3名（2%）、幼稚園に就職が3名（2%）、保育所に就職が1名、未定が1名である。

結局保育職就職予定者の合計は未定を含めて124名（74%）である。入学時の保育職希望者は112名（64%）であるから、入学時「まだわからない」と答えた31%の群から保育職に就職したのが3分の1（10%）ということになる。非保育職希望者は入学時にわずか6%だったが、企業や官庁等に就職した者は38名（23%）である。またこの時点での進路先未定者は4名、進学希望が1名、病気治療が1名となっている。

②保育職の継続について

保育職をいつまで継続するかについてであるが、入学時には最も多かった「再就職」型は卒業時にはかなり減少し、「結婚退職」型と「出産退職」型が大幅に増加している。

「生涯継続」型と「わからない」はほぼ同じ比率であった。これは同時期に行われた私立短期大学協会による全国の保育系短期大学生対象の意識調査結果と同様の傾向を示している。（表21）

幼稚園就職者と保育所就職者を比較すると、前者は後者に比べて「結婚退職」型が多く、「生涯継続」型が少ない。実習や就職活動の機会に現実の職場を知って、再就職の道がそれほど容易ではないと感じたのであろうか。実際、結婚や出産を契機に退職する例は他の調査等からも明らかにされているとおり、かなりの数に昇っている。保育の質的向上には保育者の定着と継続は重要な課題であるが、それには多方面的の努力が必要であると思われる。^{注(3)}

③保育職への適否

「あなたは保育者に向いていると思いますか」という質問に対して、幼稚園就職者は57%、保育所再就職

者は35%が肯定している。「どちらともいえない」はちょうどその逆の比率を示している。（表22）保育職に就職が決まっていいるが「あまり向いてない」という学生が幼稚園就職者に3名、保育所就職者に2名いる。向いてない理由は「自信がない」「性格的に向いていない」「やる気だけではだめで子どもが好きならあまり叱れそうもない」であった。

非保育職に就職した学生たちが保育職を選ばない理由は「自信がない」が45%、「勤務時間の問題」13%、「給与面での問題」5%、その他の理由が34%であった。その他の内容は「入学前と後では考え方が変わり、重要で責任ある仕事と思うから」「実習して自信がなくなった」「自分は保育者にふさわしくない

と思った」「子どもは好きだが実習して体力がついて
いけないと思った」「子どもが好きでない」「イメージ
がちがった、自分にあってない。実習して印象が
悪かった」「どちらにしようか思い悩んだが、ためし
に受けた企業に合格したから」などであった。実習
の影響がかなり大きいことがわかる。

④保育職の捉え方

保育職就職者と非保育職者の保育職イメージを比
べると、「健康」「子ども好き」は両者とも1位の項
目だが、後者は前者に比べて「対人関係が難しい」
「しっかりした人生観・教育観が必要」を選んだ学
生の比率が少し高かった。(表23)

⑤学生生活について

どのような学生生活をおくるかについて、1991年
度生は入学時では「2年間で保育者としての知識を
学びたい」を選んだのが50%、次が「大学生活をエ
ンジョイしたい」が34%、「大学生としての教養を深
めたい」が8%と続いていた。卒業時には順に41%、
34%、4%となった。9%の学生は「保育者として
の知識を学びたい」のに学ばなかった(学べなかつ
た)わけである。(表24)

また入学時1%だった「特に考えてない」が卒業
時の「特になし」8%へと増加している点にも留意
したい。

就職先別にみると、保育職就職者はさすがに「保
育者としての知識を学んだ」が約半数を占め、非保
育職は「大学生活をエンジョイした」が半数であつ
た。

⑥進路先未定者について

保育職に就きたいか否か「わからない」「どちらと
も決まらない」、保育職には「就かないがまだ未定」
など、進路の不明確な者が卒業前2カ月の時点で4
名はどいる。この4名とも資格を取得する理由は「将
来の生活に役立つから」と答えており、また1名は
保育科を選んだ動機が「ただなんとなく」とあいま
いであった。保育職への適否は「どちらともいえな
い」が3名「やや向いている」が1名である。おそ
らくは学業の面においても弱さのある学生たちでは
ないかと推測される。

⑦保育者として働くことの不安

自由記述であるが、幾つかにカテゴライズできる。
幼稚園就職者も保育所就職者も保育者としての指導
力・判断力、保育技術・能力、適性などに最も不安
を感じている。「勉強すればするほど自信がなくなつ
た」「2年間の学習では未熟」「専門家として不十分」
「集団指導の不安」「個別的配慮の能力」「責任が重
い」「ピアノの技術」「机上の知識と現実のギャップ」
等、就職を目前に多くの不安を抱えていることがわ
かる。健康・体力についても「他のことができる余
力があるか」「病気になっても休めない」等の心配、
「早番・遅番の不規則勤務に適應できるか」等の不
安がある。

次に職場の人間関係に対する不安もかなりの記述
があり、同僚、先輩との関係、経営者との関係、保
護者との関係、子どもとの関係等が挙げられている。

数は少ないが、経済的不安の訴えもあり、「希望す
る園では自活のできる給料ではなかったため、幼稚
園希望だが保育所に就職した」学生、「一人暮らしの
経済的不安」「仕事が大変な割に給料が安い」等であ
る。保育職の労働条件はまだまだ改善すべき点多
いが、特に自活可能な賃金の保障は切実な要求では
ないだろうか。^{註(4)}

おわりに

以上のような意識調査から把握した学生像は決し
て十分ではないが、保育者養成の教育になんらかの
かたちで役立てていきたいと考える。

とくに乳幼児との交流体験の減少は保育の専門家
としてのみならず、将来の子育てにも影響が大きい
と思われる。実習やボランティア活動等、実際の体
験を重視し、理論と実践のバランスのとれた保育者
養成に務める必要を強く感じている。

注

- (1) 福川須美「保育科学生におけるライフスタイルの変化—II。意識調査から見た保育科の学生像」駒沢女子短期大学「研究紀要」第26号 P29～42 1993
- (2) 思春期、青年期における乳幼児との交流体験の不足は、将来母親・父親として育児に従事した際の育児不安との関連がつとに指摘されている。保育者養成の場のみではなく何らかの社会的条件・環境の対策が望まれる。小出まみ「地域の子育てをめぐる状況」保育白書1993年版 草土文化社 参照
- (3) 全国保母養成協議会専門委員会「保母養成校卒業生の就職動向調査」保母養成資料集第8号 1993によれば、卒業後毎年、約1割強が退職している。6年目には退職理由は結婚のためが多くなるが、園の方針と合わないその他の理由でやめている。今後、卒業生の追跡調査も機会をみて行いたいと考えている。
- (4) 最近発表された私立幼稚園の職場についての実態調査としては、日本私立幼稚園連盟人材確保特別委員会「教員採用と職務環境に関する調査」報告書1993、全国私立学校教職員組合連合幼稚園・保育園協議会「私立幼稚園実態調査」1993がある。後者によれば、私立幼稚園教員の「やめたい理由」ベスト3は、①仕事の割に給料が安い②家に持ち帰る仕事が多く自分の時間が持てない③時間外労働が多く残業手当もない、であった。

参考文献・資料

- (1) 日本私立短期大学保育科研究委員会「保育科系短期大学生意識調査報告書—平成3年4月入学生対象—」
- (2) 同委員会「同報告書—平成5年3月卒業生対象—」
- (3) 高木庸一・天野珠子・福川須美「保育科学生におけるライフスタイルの変化」駒沢女子短期大学「研究紀要」第26号1993